

時代を創る表現者

—An Artist Who Defined His Era

Takehisa Yumeji

竹久夢二

最高傑作《黒船屋》、
約40年ぶりに東京へ

2026年10月23日(金) —
2027年1月11日(月・祝)



東京国立近代美術館
The National Museum of Modern Art, Tokyo



竹久夢二《黒船屋》 1919(大正8)年 竹久夢二伊香保記念館
Takehisa Yumeji, *Kurofuneya*, 1919, Takehisa Yumeji Ikaho Memorial Museum

竹久夢二 時代を創る表現者



晩年の夢二 竹久夢二伊香保記念館

竹久夢二(1884-1934)は、画家、詩人、ジャーナリスト、デザイナー、イラストレーターなど、いくつもの顔をもつ表現者として、明治の終わりから昭和のはじめにかけて活躍しました。「夢二式」と呼ばれた女性像や、レトロモダンなデザインによって、大正ロマンを象徴する人物として知られています。

青春の感傷や郷愁、江戸情緒と異国趣味、都会の洗練への憧れが描き出された抒情あふれる作品は、雑誌や絵葉書、展覧会などを通して人々の共感を呼び、一世を風靡します。また、暮らしを彩る日用雑貨のデザイン、子どものための本や雑誌作り、流行歌「宵待草」の作詩、関東大震災の記録など、時代をリードする仕事により、続く世代にも大きな影響を与えました。幅広いジャンルで活躍した夢二は、アートとメディアを横断した先駆的なクリエイターと言えるでしょう。

本展覧会は、夢二の最高傑作と名高い《黒船屋》をはじめ、日本画や油彩画、木版画、スケッチ、多種多様なデザイン、スクラップブックなど、全国の夢二コレクションから約500点の作品や資料を集めることで、その多岐にわたる仕事に迫ります。「美術」という枠を超えて、時代を捉え、流行を生み、人々に愛された表現者、夢二にご注目ください。

1 最高傑作《黒船屋》、 約40年ぶりに東京へ

夢二の最高傑作と名高い《黒船屋》。黄八丈の着物をまとい、黒猫を腕に抱いて、「黒船屋」と書かれた木箱に腰かけた女性のイメージには、日本の浮世絵と西洋の近代絵画のエッセンスがみごとに融合されています。黄色と黒のコントラストに加えて、襟のオレンジや帯のグリーン、袖と裾からのぞく襦袢のピンクと紫など、夢二のモダンな色彩感覚が光ります。また、江戸時代には、黒猫を飼うと結核が治ると信じられていたことから、制作当時、結核を患っていた恋人の彦乃を想って描いた作品と思われています。本作品を所蔵する竹久夢二伊香保記念館の協力により、約40年ぶりに東京で公開されます。

《黒船屋》 1919（大正8）年 竹久夢二伊香保記念館



《秋のいこい》 1920（大正9）年 夢二郷土美術館

2 全国の 夢二コレクションが集結！

竹久夢二伊香保記念館、夢二郷土美術館、金沢湯涌夢二館、竹久夢二美術館、千代田区（龍星閣竹久夢二コレクション）といった全国の夢二コレクションから、夢二の代表作や知られざる名作をはじめ、約500点の作品や資料が集結！とりわけ、円熟期の日本画である《黒船屋》や《秋のいこい》《九連環》などが勢ぞろいする大変貴重な機会です。絵画だけでなくデザインや資料も交えて夢二の全貌に迫る、夢二展の決定版にご期待ください。

3 レトロモダンな 夢二のデザインを一挙紹介

本の装幀、雑誌や楽譜の表紙、ポスターなどのグラフィックデザインから、千代紙、絵封筒、手拭い、浴衣、半襟などの日用雑貨やファッションのデザインまで、夢二のデザインの仕事を余すところなく紹介します。大正時代の人々を魅了したレトロモダンなデザインは、100年以上経った今も色褪せない魅力を放っています。



左：千代紙「桜草」（港屋版） 1914-1916（大正3-5）年 竹久夢二伊香保記念館
右：『婦人グラフ』第3巻第5号（国際情報社） 1926（大正15）年5月1日 竹久夢二伊香保記念館



岡山県出身の竹久夢二（本名・茂次郎^{もじろう}）は、1901（明治34）年、17歳になる夏に上京、苦学しながらの投書家時代を経て新聞や雑誌のために絵や文章を手がけるようになります。日常のなにげない情景を掬い上げる新鮮な視点と、大ぶりの筆使いの素朴な絵の親しみやすさが人々の共感呼び、明治末期から大正初期にかけて、夢二の仕事は雑誌や詩画集、絵葉書などを通じてたちまち人気を博しました。細身の体つきで黒目やまつげの強調された大きな目を持つ独特の女性像は「夢二式」と称され、従来の浮世絵系の挿絵とは異なる、近代的な美意識を反映したものととして若い人々の支持を得ました。

女性たちがみな夢二式の顔つきと装いに!?

大きな目とほっそりした身体つきの女性が、草むらに座る姿を描いた《草に憩う女》は、ハイカラな着物と帯も相まって、まさに夢二式の女性像を体現した作品です。また、夢二が雑誌に寄せたコマ絵を集めた『夢二画集 春の巻』は、夢二式の女性が多数掲載された画集と宣伝され、ベストセラーに。やがて街には夢二式の女性たちがあふれ、社会現象を巻き起こしました。当時の夢二の人気ぶりについて、画家の木村莊八^{しやうはち}は「夢二式に非ざれば女学生は人間でない様な素晴らしい全盛を極めた場合があるのである」と回想しています。



【前期展示】《草に憩う女》 大正初期 静岡市美術館



【前期展示】『夢二画集 春の巻』(洛陽堂) 1911 (明治44)年
【1909年 初版】 千代田区 (龍星閣竹久夢二コレクション)

社会の弱者へのまなざし

赤十字マークのついた着物を着た骸骨に、女性が身を寄せて泣いています。1905（明治38）年の6月に平民社の新聞『直言』に掲載されたこのコマ絵は、日露戦争を受けて描かれたものです。従軍して帰らぬ人となった男性とそのパートナーを描いたと思しきこの作品には、夢二の反戦への思いが込められています。『平民新聞』などにも寄稿した夢二は、労働者や貧しい人といった社会の弱者への共感を描き出しました。



【無題】『直言』第2巻第20号 (直行社)
1905 (明治38)年6月18日 金沢湯涌夢二館

夢二は、千代紙、便箋や封筒、手拭いやうちわ、浴衣や半襟、書籍や楽譜などのデザインによって、人々の暮らしを美しく豊かにすることを提案しました。国内外の美術雑誌を参照して古今東西の美術や工芸のイメージを取り入れながら、植物や幾何学などを鮮やかな色彩で大胆に配置することにより、それまでにない斬新なデザインを次々と生み出します。夢二のデザインした品々は、1914（大正3）年に日本橋に開店した「港屋絵草紙店」や、大阪の「柳屋」で売り出され、人気を博します。美術家が自らの作品を商品化して販売するという画期的な試みであった港屋には、恩地孝四郎や東郷青児ら若き芸術家や作家も集いました。



《港屋絵草紙店（港屋版）》 1914（大正3）年 金沢湯涌夢二館



左：千代紙「桜草」（港屋版） 1914-1916（大正3-5）年 竹久夢二伊香保記念館
右：半襟図案原画「赤い実と小鸟」 1914-1916（大正3-5）年 竹久夢二伊香保記念館



夢二式デザインのグッズショップ

木版画《港屋絵草紙店》には、異国からの文化がもたらされる「港」と、当時の人々にとって江戸への郷愁を掻き立てる言葉であった「絵草紙店」を組み合わせたイメージが、みごとに表現されています。港屋は木造で間口二軒ほどのささやかな店構えでしたが、夢二の手による可愛いデザインの千代紙や半襟などが評判となり、東京名所として訪れる人も多かったといえます。

実らぬ恋を歌った流行歌

「宵待草」は、夢二が千葉県銚子で出会った女性との実らぬ恋をきっかけに生まれました。1912（明治45）年に雑誌『少女』に発表された小唄がもとになっており、1913（大正2）年に刊行された書籍『どんたく』で、現在の詩形で発表されました。その後、1918（大正7）年に、東京音楽学校でヴァイオリンを学んでいた多忠亮おおのただすけがこの詩に感動して曲をつけた『宵待草』（当初は『待宵草』）が、夢二デザインの表紙で「セノオ楽譜」から出版され、たちまち流行歌になりました。

待てど暮せど 来ぬ人を
宵待草の やるせなさ
今宵は月も 出ぬさうな。



【前期展示】セノオ楽譜 No.106「待宵草」1921（大正10）年
[1918年初版] 千代田区（龍星閣竹久夢二コレクション）

懐かしくて新しいものは、いつの時代も人々を惹きつけてやみません。とりわけ急速に近代化が進んだ明治末期から大正時代にかけて、次第に遠のきつつある江戸時代への追憶や、まだ見ぬ異国の文化への憧憬が、人々の情緒の基調をなしました。この時代に絵かきと物書きの道へと進んだ夢二は、古く過ぎ去りゆくものと、新しく渡来してくるもの、いずれにも心を動かし、それらを矛盾なく自己の表現の中で統一してゆきます。レトロモダンという新しい価値の創出、そこにこそ、夢二があれほどまでに大衆の人気を得た理由があるのではないのでしょうか。



《秋のいこい》 1920 (大正9)年 夢二郷土美術館

画家、夢二の円熟期

大正中期、画家としての円熟期を迎えた夢二は、《黒船屋》をはじめとする代表作を次々と生み出しました。

《秋のいこい》に描かれるのは、プラタナスの枝が垂れ下がるベンチに、薄紫の木綿縞の着物を着て、青い蝙蝠傘に身を預けて座る女性の姿。旅行用の大きな信玄袋を傍らに置いた彼女は、田舎から上京してきたのでしょうか。制作の背景として、1918 (大正7)年に起こった米騒動による不況があったのではないかと指摘されています。

京都・嵐山の保津峡を描いた《嵐峡の春》と、福島の猪苗代湖を描いた《猪苗代の秋》からは、夢二の風景画家としての力量がうかがえます。



《黒船屋》 1919 (大正8)年
竹久夢二伊香保記念館



《九連環》
1918 (大正7)年 個人蔵



右：【前期展示】《嵐峡の春》 1923 (大正12)年頃 竹久夢二美術館
左：【前期展示】《猪苗代の秋》 1923 (大正12)年頃 竹久夢二美術館

港町の異国情緒

九連環とは九つの環を組み合わせた「チャイニーズリング」と呼ばれる知恵の輪。この知恵の輪が解きにくいことを、男女の恋愛に例えた中国の歌曲「九連環」は、江戸時代に長崎の中国人から日本に伝えられ、中国語の歌詞の音をまねた「かんかんのう」(別名「看看踊」)となって、明治半ば頃まで流行しました。環の連なった模様の着物を着た遊女は、宣教師とともに「かんかんのう」を踊っているのでしょうか。異国情緒と夢二のモダンな感性が凝縮されたこの名作が、約40年ぶりに展覧会に出品されます。

関東大震災は東京の街を灰と化し、夢二人気も終焉に向かいます。そんな中、夢二は自ら設計した自宅兼アトリエである「少年山荘」で取り組んだ創作人形の分野で新風を起こす一方、群馬県の榛名の自然に心を寄せ、生活と結びついた芸術への関心から、「榛名山美術研究所」を構想します。それは、身近な自然や手仕事を尊ぶ姿勢に根ざしつつ、社会生活の変化をとらえる尖鋭的な視点から生まれたものでした。研究所の開設は産業美術の視察を目的とする外遊のために延期され、帰国後も実現には至りませんでした。この理想郷の夢が叶っていたならば、時代を表す活動の一つとなったでしょう。

関東大震災とジャーナリスト精神

1923(大正12)年9月1日、相模湾を震源とする巨大地震が関東を襲います。地震発生時、渋谷町宇多川の自宅におり無事だった夢二は、焼け野原になった東京を歩き回り、その様子をスケッチしました。夢二のスケッチや文章からは、被災した町の様子だけではなく、流言蜚語の恐ろしさや、たくましく生きようとする人々の姿が伝わってきます。本展では、スケッチや『都新聞』に夢二が連載した「東京災難画信」の記事、そして震災にまつわる貼り紙や新聞記事、写真などが貼り込まれた貴重なスクラップブックを通して、夢二のジャーナリスト精神に迫ります。



《震災スケッチ 築地三一教会》1923(大正12)年 竹久夢二伊香保記念館



《榛名山賦》1931(昭和6)年 竹久夢二伊香保記念館



《立田姫》1931(昭和6)年 夢二郷土美術館

舞姫たちの競演

1931(昭和6)年1月、評論家の望月百合子らとともに帝国劇場でサハロフ夫妻の舞踏公演を見た夢二は、数日後訪ねてきた望月に、公演で見た衣裳と同じサーモン・ローズ色の着物で舞う女性の絵を贈りました。これがもとになって《榛名山賦》や《立田姫》が生まれたと望月は回想しています。

榛名山を背景に描かれるのは、春の女神、佐保姫。画賛には、光を湛えた榛名湖の美しさが詠まれています。富士山を背景に描かれるのは、秋の女神、立田姫。画賛は、唐代の詩人杜甫の詩「歲晏行」の一部を引用・改変し、貧しい民の苦しい生活を詠じたもの。今回この2点が、14年ぶりに揃って展示されます。



左：『婦人グラフ』第3巻第5号（国際情報社）1926（大正15）年5月1日 竹久夢二伊香保記念館
右：『若草』第1巻第1号（宝文館）1925（大正14）年10月1日 竹久夢二伊香保記念館

モダンガールの発信源

関東大震災の翌年に創刊された『婦人グラフ』は、パリの婦人雑誌をモデルに、ファッションやアート、インテリア、グルメなどを取り上げた女性向けのグラフ雑誌。表紙や挿絵には機械刷りの木版画が貼り込まれた豪華な雑誌でした。やや遅れて創刊された『若草』は、「若き女性の雑記帳」を標榜し、読者からの投稿作品を掲載して少女小説の流行に寄与します。夢二が多くの号の表紙や挿絵を手がけた2つの雑誌は、モダンガールのイメージ形成に大きく貢献しました。

関東大震災からの復興が進んだ大正末期から昭和初期にかけて、都市に花開いた大衆文化を享受し、新しいファッションに身を包んだ「モダンガール」たちが登場します。かつて「夢二式」の女性像で一世を風靡した夢二は、移り行く時代の中で、洋服を着用し、髪を短く切り揃え、西洋風の装身具を身に着けた女性や、流行のウェーブヘアで着物をモダンに着こなす女性たちの姿を描き出しました。雑誌やポスターを中心に、夢二が生み出した着物と洋服のモダンガールで、展覧会を締めくくります。



《四季の女》1929（昭和4）年 朝日町立ふるさと美術館

知られざる名作

依頼主からの注文で制作された本作は、あらかじめ絹に描いた6点の絵を、季節の移ろいに沿って右から並べた押絵貼屏風です。梅の下で艶やかな着物の女性が羽子板に興じる「新春」、舞妓と桜を組み合わせた「暮春」、たんぽぽの綿毛を手にした女性が草に憩う「惜春」、濡れ縁に腰掛けた女性の左手に指輪が光る「薄暮」、落葉した木々の間に女性が佇む「立秋」、そして洋装の女性が雪山でスキーに励む「白夜」。

彼女たちは夢二の描く女性に特有の憂いを帯びつつも、洋風の髪型や、日傘とバッグ、指輪などのアイテムによって、モダンな雰囲気を漂わせています。

第5章 着物と洋服のモダンガール

恩地孝四郎（版画家・装幀家）

彼は必要に迫られてかく場合は徹夜に徹夜を重ねて夜も昼もかいた。

三晩も四晩も徹夜して一つの展覧会を作り上げたこと再三である、後の画集など大部分さうである。

「夢二の芸術・その人」『書窓』第3巻第3号、1936年8月

堀柳女（人形作家）

兎にも角にも私は夢二さんの所に長い間出入りはしてゐましたが、

特別絵を習った訳でもなく、理論一つ聞いた訳でもありませんが、

あの方の周辺一帯に溢れ流れてゐた芸術的雰囲気は、私の上に色濃く影響して、後々まで消えるどころか、それが根源となり私を育ててくれ、芸術と云ふものの真髄を教へられたと思つてゐます。

「夢二さんの思ひ出」『人形に心あり』文藝春秋新社、1956年

森口多里（美術評論家）

竹久君は人物に新しいタイプを与えた、というよりは人物の新しいタイプを創造したというべきであろう。

「美術史の中の夢二」『本の手帖』第2巻第6号、1962年7月

宮崎白蓮（歌人）

夢二さんよりも以前には、たしか、夢二さんのような役割を、世間で受持つて評判をとるような人は居ませんでした、夢二さんの後には、それはどうなのでしょうねえ。

「夢二さんのこと」『本の手帖』第2巻第6号、1962年7月

吉屋信子（小説家）

夢二式の大きな目に憂愁をたたえた美女は近代的の浮世絵だった。そこにあふれる叙情と感傷、

そしてデカダンの時代感覚に日本の情緒の匂いもこもって、若い世代のひとを引きずってやまなかった。

「竹久夢二」『私の見た人』朝日新聞社、1963年

望月百合子（評論家・翻訳家）

夢二という人は女も家も山も木も凡てを自分好みに作り変える創造主みたいところがある […]。

「夢二とユリボ」『婦人公論』第59巻第4号、1974年4月

やなせたかし（漫画家・絵本作家・詩人）

夢二が生前、その最盛期には圧倒的な人気がありながら、

画家からは「デッサンの狂った甘い女性用の絵」と無視され、

詩は素人の道楽として、軽視されていたことは、

やはりジャンルから外れたところに夢二がいたせいとぼくは確信するのです。

しかし、今六十年を経て、夢二の絵をみれば、それは消え去った純粹絵画の誰よりも、胸に衝撃を与えますし、いく分安直のセンチメンタリズムも時代の波に洗われ古色を帯びて、好ましく感じられます。

「星屑ひろい」『詩とメルヘン』第2巻第4号、1974年5月

淡谷のり子（歌手）

わたしが上野の東洋音楽学校に入りまして、その頃セノオ楽譜というところから夢二さんが表紙の絵を描いている楽譜が出ていまして、わたしもそれで歌ったりもしていたんですよ、『宵待草』とか『蘭灯』とかをね。

「渡航前 竹久夢二とまわった音楽会のことなど」『青春と読書』第20巻第12号、1985年12月

1884 (明治17) 年		岡山県邑久郡本庄村に生まれる。本名茂次郎。
1899 (明治32) 年	15歳	一家で福岡県遠賀郡八幡村に転居。2年後に家出して上京。
1902 (明治35) 年	18歳	早稲田実業学校へ入学。
1905 (明治38) 年	21歳	雑誌『中学世界』に投書したコマ絵「筒井筒」が第一賞となる。
1909 (明治42) 年	25歳	初の著作『夢二画集 春の巻』が刊行され、ベストセラーに。
1911 (明治44) 年	27歳	「月刊夢二エハガキ」の発行開始、9年間継続される。
1912 (明治45・大正元) 年	28歳	京都府立図書館で初の個展「第一回夢二作品展覧会」を開催。
1914 (大正3) 年	30歳	日本橋に版画や書籍、自身のデザインした小物を扱う港屋絵草紙店を開店。
1916 (大正5) 年	32歳	この年から1927年まで270冊あまりの「セノオ楽譜」の表紙を担当。 11月、京都に移住。
1918 (大正7) 年	34歳	京都府立図書館で「竹久夢二抒情画展覧会」を開催。11月、東京に戻る。
1923 (大正12) 年	39歳	関東大震災の焼跡を歩いて描いたスケッチと文章による「東京災難画信」を『都新聞』に連載。
1924 (大正13) 年	40歳	東京の松原に自ら設計したアトリエ兼住居「少年山荘」が完成。
1930 (昭和5) 年	46歳	美術と工芸の融合を目的とする「榛名山美術研究所」を構想。
1931 (昭和6) 年	47歳	横浜港よりホノルルを経由してサンフランシスコ、ロサンゼルスに渡る。 制作をしながら、展覧会の開催、邦字新聞への寄稿、講演などを行う。
1932 (昭和7) 年	48歳	ロサンゼルスからヨーロッパに渡り、ベルリンやパリなどを訪問。
1933 (昭和8) 年	49歳	ベルリンのヨハネス・イッテンの画塾で日本画の講習を行う。9月帰国。 10月、台湾を訪れ台北で3日間の展示を行い、帰国。
1934 (昭和9) 年		体調を崩し、信州富士見高原療養所に入院。9月1日、永眠。享年49歳。

開催概要

竹久夢二 時代を創る表現者

会場：東京国立近代美術館 1F企画展ギャラリー

会期：2026年10月23日(金)–2027年1月11日(月・祝)

[前期] 2026年10月23日(金)–11月23日(月・祝)

[後期] 2026年11月25日(水)–2027年1月11日(月・祝)

キャプションに前期後期の記載がない作品は通期展示。

休館日：月曜日(ただし11月23日、1月11日は開館)、11月24日、年末年始(12月28日–1月1日)

開館時間：10:00–17:00(金曜・土曜は10:00–20:00) ※入館は閉館の30分前まで

主催：東京国立近代美術館、毎日新聞社

協賛：DNP大日本印刷、JR東日本

お問い合わせ：050-5541-8600(ハローダイヤル)

公式サイト：<https://yumeji2026-28.jp>

公式X：@artist_yumeji

観覧料金、イベント、音声ガイド、オリジナルグッズ等の情報は順次展覧会公式サイト等でご案内いたします。

本展は、東京会場以降、静岡市美術館(2027年1月23日–3月28日)、富山県美術館(2027年4月24日–6月13日予定)、

大阪中之島美術館(2028年予定)を巡回する予定です。

報道関係お問い合わせ

「竹久夢二展」広報事務局(共同PR内)担当：三井

E-mail. takehisa.yumeji.exhibit-pr@kyodo-pr.co.jp / TEL. 03-6264-2382

〒104-0045 東京都中央区築地1-13-1 銀座松竹スクエア10F



東京国立近代美術館
The National Museum of Modern Art, Tokyo